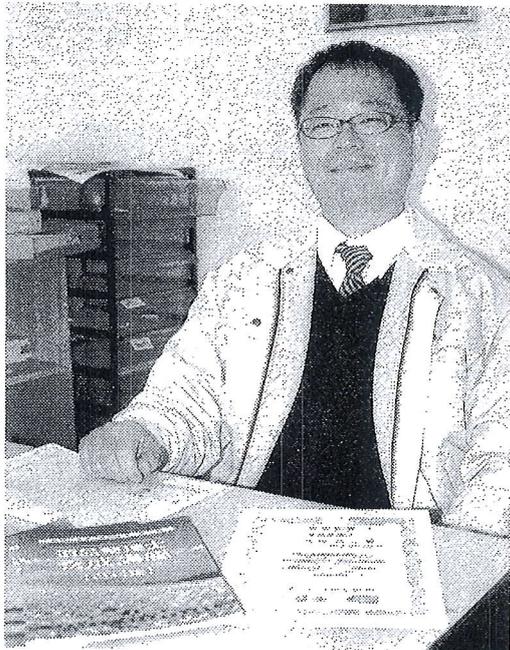


行田の久保さん 県内初 遺品整理士に

家族に伝える故人の思い

亡くなった人の持ち物を目極め、仕分ける専門業、遺品整理士の県内第一号に、行田市埼玉のリサイクル業、久保公人さん(41)が認定された。高齢化や核家族が進み、高齢者の孤独死が深刻化する今、遺品整理の需要はますます高まっている。久保さんは遺品からは隠すことができない、故人のありのままの思いが伝わっている。故人や遺族に寄り添いながら、思いを少しでも伝えられたら」と気持ち新たに話す。(江田崇)

▽涙の立ち会い
3、4年前、行田市で廃棄物処理の会社を立ち上げ、当時から遺品整理業務に数多く携わってきた。需要の高まりに伴い、法規制に精通した正しい知識で業務をこなす専門



県内第一号となる遺品整理士の認定を受け、遺品整理の仕事にますます使命感を燃やす久保公人さん。行田市埼玉のリサイクル会社「イースミ」

家を養成するため、遺品整理士認定協会(須田威会長、北海道千歳市)が昨年9月に設立されると、開講当初から通信教育で学び、2月3日に県内初の認定を手にした。「遺品整理と称して引き受けた品をそのまま不法投棄したり、勝手に処理した後、見積以上の高額請求をする悪徳業者の話も聞く。認定を受け、これまで以上に責任を感じた」と久保さん。遺品整理の仕事は全業務の半分以上を占める。需要の増加を年々肌で感じているからこそ、まなざしは真剣だ。

遺品整理の現場は東京都内や県南部の都市部がほとんどで、大半の依頼は親と別居する子どもから。故人の一生分の写真、昔よく遊んだ木刀など、昔話に花が咲き、立ち会いの最中に泣き出す家族も多い。「残す物、捨てる物を一品ずつ確認しながらの作業。一緒に住んでおけばよかったです。涙が止まらない人もいます」。身寄りのない故人の遺品は、アパートの大家さんが

需要増え 寂しさも

依頼主になるケースが多い。「残す物」のない、全てが廃棄物となる現場は淡々と作業が進むという。

▽遺族とも向き合う
厳しい現場も待っている。

トラックで駆け付けると一軒丸々「ごみ屋敷」。「昔の人は特に物を捨てない。顕著なのはビニールなどの袋。棚の隙間にたくさん詰め込む。再利用するために洗って干してあることも多い」と久保さん。異臭が漂う現場も多く、依頼主から「近所に気付かれないように、そっと片付けてほしい」と依頼されることも珍しくない。近所の人に作業について聞かれても「遺品整理」と答えることは一切ない。

「こんなエピソードも。資産家の遺品整理のとき、遺言状が出てきた。障害を持った子どもが一人いたという。「遺産を多めに配分した兄弟に、その分、その子をくれれば頼むと念押ししていました。親は「これまで考えているのか」と久保さん。故人の思いが直接的に表れる遺品は時に、口で伝える以上の説得力を秘めている。」

「遺品整理は本来は残った家族にしてみたい。仕事の増加に寂しさも感じる」と本音も。それでも多くの遺品を扱う日々は続く。「身内の死に接した家族からは、片付けたけれど、片付けたくないという複雑な思いが伝わってくる。誰かが後押ししてあげないと」。故人の「最後のメッセージ」だけでなく、残された家族とも向き合い続ける久保さんの表情は、優しく、そしてたくましかった。

遺品整理士 核家族化が進み、遺品整理を業者に委託する遺族の増加を受け、遺品整理士認定協会(☎0123・422・0528)が創設した資格。遺品整理業は現在、資格や免許がなくとも営めるが、不法投棄などを防ぎ、法規制に沿った業界の健全化を目指す。同協会は2011年9月、孤立死や家族問題に取り組む団体を中心に設立。現在、埼玉県の3人を含め、全国で約70人が認定されている。同協会は「量にもよるが、遺品整理料金の相場は10万〜20万円ほど。50万円を超えたら注意を」と呼び掛けている。